

舞台公演の経験が高齢者にもたらすものとその課題 — 地域連携事業「みんなで踊ろう」

ダンス・ワークショップ」を事例として—

原田 純子

抄録

本稿では、地域の高齢者と学生が共にダンスを創って踊るワークショップ「みんなで踊ろう」における舞台制作の過程と舞台公演（発表）の体験について、その成果と課題を検討した。方法は高齢者8人に対してインタビュー調査を実施し、そのナラティブの内容を精査した。

その結果、舞台発表を初めて体験する人には、自由に動くことや自由に表現できるこの舞台発表が、楽しく、“癖になりそう”な活動としてとらえられていた。舞台を2回経験した参加者にとっては、自己治療の手段として作品に取り組む機会であったり、仲間意識を強めたり、承認欲求を満たしたりする場ともなっていた。その一方で、舞台を取り囲む環境とその課題に目を向ける参加者もいた。

この活動が地域に根付き、高齢者にまつわる様々な社会的課題を解決できる“コミュニティ・ダンス”として成長していくには、参加者（高齢者）が学生とともに公演全体の企画や運営に携わり、衣装づくりを担当するなど、舞台公演を創るための役割の一端を担うことも必要である。また、舞台に立って踊り、それを褒めてもらうことで自身の存在意義を確認したように、一人ひとりが舞台公演を創るための、かけがえのない構成員であることを実感できる仕組みづくりが必須であると考えられる。

キーワード：ダンス、ワークショップ、高齢者、舞台公演、コミュニティ・ダンス

1. はじめに

今日、“古い”は日本のみならず、国際社会においても非常に重要な課題となっている。この高齢化する社会において、アートを活用して社会の諸問題を解決しようという「コミュニティ・アート」の動きが高まりを見せている。なかでもダンスは、「コミュニティ・ダンス」として、誰もが参加可能で、身体を媒体とし、動きと表現によって他者とのつながりを構築するという点に特徴があり、注目を集めている。

筆者は、地域の人と学生が共にダンスを創って踊るワークショップ「みんなで踊ろう」（以降、ワークショップと記述）を2011年度から継続開催している。この事業は、地域の高齢者と学生が共にダンスを創って踊るワークショップであり、ダンスを通じた交流と創造的で自由な表現の「場」を創ることを目指してきた。ワークショップへの参加者は、“堺市在住の60歳以上の男女”として、毎年度末に堺市の広報誌にて募集しているが、その約7～8割がリビ

ーターである。また、“ワークショップリーダー”と称するサポート役の学生と卒業生が10名程度、高齢者とともに活動していることが、このワークショップのひとつの特徴である。

初年度（2011年度）は単発のダンス・ワークショップとして行った事業であったが、活動の主要な部分を構成している“身体ほぐし”は、回数を重ねることでその効果を実感できると考え、2012年からは半期に10回（1年に20回）の連続講座となり、およそ2週間に一度の割合で、今日まで活動を続けている。

また、ワークショップでは、2013年度に大学祭（堺キャンパス祭）にて作品発表を行ない、初めて観客（第三者）に踊りを観てもらおうという経験をした。その後、2014年度、2015年度にも同じく大学祭で作品を発表するほか、講座内でクリスマス会（観客なし）などを行い、作品を創って踊り発表するという活動を重ねた。さらに2017年度からは、舞台公演を

実施している。これまでの積み重ねを第三者に対して発表することによって、参加者の表現技術のレベルアップを狙うとともに自信につながることを期待したからであり、広く第三者に対して舞踊（ダンス）鑑賞という文化的・芸術的な体験の機会を付与することは、社会的にも貢献できると考えたからである。これらの舞台公演は、学生と共に半年かけて創った作品を本格的な照明のもとで上演するという大掛かりな公演であり、単なる成果発表というよりむしろ、表現したいことを練りこんで作品化し、舞台にあげるといった創造的かつ芸術的な活動であると言える。

大方の参加者にとって人生初であったというこの舞台公演（2017/2018年度）の体験は、彼ら彼女らにどのような経験として刻まれたであろうか。また舞台発表を到達目標とするワークショップは、参加者にとって十分に自己を表現できる創造的な「場」としての機能を果たしたのだろうか。

そこで本稿では、2018年の公演後に参加者に対して実施したインタビュー調査のナラティブの内容を示しながら、舞台制作の過程と舞台公演（発表）の体験を含むこのワークショップが、高齢者にどのように受け止められていたかを明らかにし、「コミュニティ・ダンス」として本ワークショップが成長するための課題について検討する。

2. 地域連携事業“みんなで踊ろう”の概要

2.1 実施概要

第1回目の公演を実施した2017年度と第2回目の2018年度について、その実施概要を述べる。参加者は、前年度の2月に堺市の広報誌によって募るが、メンバーの7～8割はリピーターである。事業実施の概要は、以下のとおりである。

【2017年度】

- 参加者〈高齢者〉：男3（人）、女22
〈学生〉：在校生3、卒業生4
- 舞台公演開催日：2017年11月11日
- 舞台公演開催場所：堺市立東文化会館
- 観客動員数：270人

【2018年度】

- 参加者〈高齢者〉：男3（人）、女22
〈学生〉：在校生6、卒業生3
- 舞台公演開催日：2018年11月17日
- 舞台公演開催場所：堺キャンパスアリーナ
- 観客動員数：287人

2.2 ワークショップの内容

ワークショップは年度初めの4月から活動を開始した。リピーターが多いとは言え、必ず新しい参加者がいるので、4～6月は仲間づくり・チームづくりに主眼を置き、またこの時期に、その年の公演作品で取り上げたいテーマについての話し合いをもった。おおまかにテーマが決まると、7月からはグループを3つに分け、シーンを組み立てながらグループ毎に創作を進めた。年間を通してのワークショップの内容は表1に示すとおりである。

次に、1回毎のワークショップの内容構成について述べる。基本的な流れは、「身体ほぐし」と「創作表現」よりなる。これは、ワークショップを始めた2011年当初から変わっていない。但し、舞台発表を目標とする2017年度・2018年度は、Ⅱ期から身体ほぐしの時間を短縮し、その分、「作品創作」に時間をかけている。詳細については、拙文（原田，2014）に記載の通りである。

表1. ワークショップの内容（『女子体育』vol.59-8・9, p.115、(2017)より筆者加筆）

期	I	II	III
月	4、5、6	7、9、10、11	12、1、2
テーマ	仲間づくり・チームづくり／他者を感じて踊る 公演作品のテーマについての話し合い	作品創りと踊りこみ 舞台公演	鑑賞と振り返り
目的	ひとつの共創体として自他を認識し、他者の動きに呼応して動くという感覚を育てる。	作品の構築。伝えたいことを、しっかり観客に伝えるための、表現の練習 →舞台発表。	舞台の記録映像の鑑賞と観客アンケートによる振り返り。舞台発表を通して得たものは何かを踏まえての創作表現活動。

表 2. 公演の概要

年度	2017年度	2018年度
公演（第3部作品）のタイトルとテーマ	“あしたも話そうーところで、からだで” 「歳を重ね、毎日いろいろあるけれど、人生は楽しい。明日も皆で語り合おう」をテーマに7つのシーンより構成。	“2018- そのさきの希望” 「2018年は、地震や台風など自然災害に悩まされた年だった。それでも、仲間がいるから“がんばろう！”と思えた。夢を語ろう、明日を信じて」をテーマに、6つのシーンより構成。
小作品のタイトルとテーマ	○“雨の日はるるんるん” 2013年キャンパス祭初演 雨の日も風の日も私たちは元気に踊る！ 普段の参加者たちの楽しくにぎやかな様子をイメージして創作。 ○“祈る” 2015年のキャンパス祭初演 戦後70年を迎えた2015年に、あらためて平和を願って祈らずにはいられないと創作した作品。	○“掃く、拭く、サボ・サボ・サボ” ワークショップでのウォーミングアップとして、掃除の動作をデフォルメして作った作品。今回の公演のために再構成した。 ○“即興 A-そよ風のイメージ” ワークショップ・メンバーの即興的な動きを活かし、そよ風をイメージして創った作品。

2.3 舞台公演の概要

2017年度の公演は堺市立東文化会館のメインホール（客席数401席）にて、2018年度は堺キャンパス体育館アリーナ（300席を設営）にて、それぞれ約2時間（休憩含む）の上演であった。公演では、卒業学年の4年生作品の発表も同時におこなった。プログラムは3部構成で、第1部は小作品集、第2部は4年生作品とパフォーマンス・サークルKAYMOによる群舞、第3部がワークショップ・メンバー（学生含む）による大作である。ワークショップ・メンバーによる小作品は2つで、いずれも普段のワークショップの中で練習していた踊りを、隊形を変えるなどして再構成し、作品化したものである。ひとつはリズムがはっきりしている楽しい踊り、もうひとつは大枠だけを決め、ゆっくりとした動きで即興に近い形で踊る作品である。メンバーは、自分が踊りたい方の作品を選んで出演した。なお、小作品については強制ではなく、出演しないメンバーもいた。表2にその概要を示す。

2.4 インタビュー調査について

舞台制作の過程と舞台公演（発表）の体験を含むこのワークショップが、高齢者にどのように受け止められていたかを明らかにするために、2018年度の公演を終えたのちにインタビュー調査を実施した。対象者は、2018年度の公演参加者の中から、インタビューを承諾した14人（男2人・女12人）である。本稿では、さらにその中からワークショップへの参加の年数（ダンス経験）を勘案し、以下の8人のナラティブについて検討する。質問項目は、①参加の

きっかけ、②参加の目的、③参加の感想、④舞台を経験して、⑤学生が一緒に活動することについて、⑥次回公演への期待の6項目を主として、半構造的に進めた。対象者8名の詳細については、表3に示すとおりである。インタビューは1時間程度を予定して臨んだ。経験の差（公演出演回数）もあり、インタビュー時間が一定していない。

3. 舞台の実験がもたらすもの

3.1 “自由”に踊る喜び

2018年に初めてワークショップに参加したGさんとHさんとともに、普段の動きの中で「背中を伸ばしたりするのを意識するようになった」という。舞台に立つことは、まったくイメージしていなかったという2人の語りを以下に示す。

① Gさん（女性）—初めて舞台に立ったことについてのナラティブ

皆さんのサポートがあるから、楽しかった。癖になりそうな感じがした。他の方のサポートが大きいから、自分のしていることはちょっとしかないけど、スポットライトを当ててもらって感謝している。

【何が癖になりそう？】自由に身体を動かす場面も、毎度違うことをしているが、それが好き。お客さんには（正解が）分からないので、好き勝手に自由に動ける。自分自身伸び伸びできるという感じ。（中略）でも、当日のリハーサルは、照明が当たった瞬間真っ白になった。どこに立っているかも全然分からなかった。先生が何か言っている

表3. インタビュー調査の対象者

対象者	年齢	経験年数と 舞台回数	参加のきっかけ（インタビュー内容より）	実施日 2019年	インタビュー 時間
Aさん（男）	70歳	8年2回	本学で開催されていたほとんど全ての講座に申し込んだ。このワークショップは最後まで迷ったが、“まあ1回やってみるか”と軽い気持ちで参加した。	2月4日	65分
Bさん（女） Aさんの妻	65歳	8年2回	Aさん（夫）に誘われ、夫婦で一つくらい共通の趣味があっても良いかと思って始めた。もともと運動系は苦手な方だが“これなら君にもできる”と夫が勧めてくれた。	2月7日	52分
Cさん（女）	61歳	4年2回	市の広報誌で見つけた。学生の頃、創作ダンスをやっていた。かつて小学校の教員だったので、運動会や体育の授業などで創作ダンスに関わっていた。	1月31日	64分
Dさん（女）	63歳	3年2回	市の広報誌で見つけた。昔、創作ダンスをしていて、講師（筆者）の名前を知っていた。夫が亡くなり、気分が落ち込んでいたこともあり、とりあえず参加しようという感じだった。	2月7日	50分
Eさん（男）	76歳	2年2回	妻（Fさん）が広報誌で見つけて応募した。妻が申し込んだものには何でもついていく。	2月4日	52分
Fさん（女） Eさんの妻	68歳	2年2回	市の広報誌で見つけた。「身体表現」という言葉に惹かれた。「体操的なもの」をイメージしていた。夫を誘ったのは、昔の交通事故のせいで身体が硬く、将来寝たきりになると困ると思ったから。	2月4日	53分
Gさん（女）	62歳	1年1回	以前、講師（筆者）による単発の講座を受講したことがあり、その名前を広報誌で見つけて応募した。「みんなで踊ろう」の“みんなで”というのがすごく楽しそうに感じた。	1月31日	47分
Hさん（女）	68歳	1年1回	市の広報紙を見て、「みんなで踊ろう /60歳以上」とあったので、高齢者が皆で手をつないで踊ったりするのかと思って申し込んだ。あまり深くは考えていなかった。	1月31日	40分

るけど、どこ？という感じだった。本番は全然大丈夫で、意外とできたな。ビデオで見るとずれているところもあったけど、最後は楽しかった。真っ白になっている時はどっちを向いているか分からなかった。

② Hさん（女性）—初めて舞台に立ったことについてのナラティブ

（舞台で初めて踊って）嬉しかった。楽しいし。回数も多く練習していたし。舞台に出る間際まで練習していた。間違えて皆と違うことをしたらダメだと思って。間違えたけどね、お掃除ダンスの時に。舞台に出る寸前まで楽しかった。とくに、（体育館は）普段練習している場所だったので、感じもよく分かるし、凄く楽しかった。癖になる感じ。**【Q.何が楽しかった？】** 踊ることも楽しいし、皆と一緒にいろいろ自由のところを考えたり、それが出来上がっていく、先生もどんどん良いように考えてくれる、そんなのが凄く楽しい。どんどん良くなっていくのが嬉しい。他の皆には本当にびっくりする。凄いなあと思う。（自分は）まだまだ足を引っ張っているけど。

（舞台に出た後と前では）何事にもやる気が出てモチベーションが上がった。いろんな事に頑張れるというか、自信をもらえるというか。だんだん老いてくると、いろいろできなくなってくる。少しずつ物忘れとか出てくるけど、こういう舞台が終わると、年のせいにしないで頑張ろうと思える。来年は、自由に踊りを創るときに、自分の意見をしっかり言いたい。黙って見ているだけではダメだと思っている。

初めて舞台に立つGさんもHさんも、その体験を、“癖になる感じ”だと語った。二人のナラティブから、“自由に”踊る、“自由に”考えることへの喜びや楽しさがうかがえる。自分の身体を使った表現を自由に考えて、自由に踊ることは、自分をさらけ出すことでもある。それを仲間を受け入れてもらいつつ、皆と一緒に創る作品が徐々にできていくという喜びや嬉しさが、「また機会があれば、練習がなくても参加したい」というGさん、だんだん老いを感ずても、「年のせいにしないで頑張ろうと思える」というHさんの、次への意欲や自信につながっていると推察される。

3.2 内と外に向かう視点

一方で、今回が2回目の舞台経験であるCさんは、「1回目は踊っただけで嬉しかったが、今回は内容も高まったと思うし、自分も成長したと思えるから、反省すべき点がたくさんあって、公演のDVDが怖くて見れない。自分の動きに満足できないことが分かっているから見れない」と語っていた。この語りから、Cさんは今回、ただ単に舞台に立って満足するというのではなく、自分の表現を探求しようとしていたことが分かる。また、「私事だが…」と言いながら、次のような語りがあった。

③ Cさん (女性) — 『失意』の踊りに取り組んだことについてのナラティブ

私事ですが、父が10月に亡くなったのです。ちょうど公演の練習している期間に父が入院したりして、『失意』(※Cさんが踊った第3部の1シーン)のときは本当に泣いていたけど、ちょうどよかったというか。去年は観に来てくれたのに、今年も亡くなっていて…。まあちょうど良かった、『失意』の踊りがあって良かった。父も88歳だったので、充分父の人生を生きたので…。

このナラティブのなかに、「まあちょうど良かった、『失意』の踊りがあって良かった(下線は筆者による)」という語りがある。ここからは、Cさんが、自らの父親に対する思いを踊りに託し、踊ることによって悲しみに向き合い、再生してゆく姿を推察することができる。

安彦(2001)は、自身が開く「造形教室」が、「それぞれが自由に描き、身をもった自己表現の体験を通して、自らを癒し、支えていく。そのような「営みの場」である」と紹介している(p.34)。そしてまた、われわれ日本人が、「病み疲れたケガレ(気枯れ)の状態に陥ったとき、ものを作ったり、歌い舞い踊ったり、身をもった行動によって自らを癒し、再生を図ろうとしてきた」ことを挙げ、このような自己表現の行動が、われわれの心身に深く根ざした癒し、すなわち自己治癒の方法ではないかと述べている(p.35)。このことから、Cさんが公演に向けて『失意』の踊りに取り組んだことは、“父の死”という悲しい出来事からCさん自身を回復させる自己

治癒のための営みであったとも考えられる。

さらに、大学のときから創作ダンスをしていて、今も体操教室などで教えているDさんもこのワークショップでの舞台は2回目であった。自身の活動経験を踏まえて、Dさんは以下のように語った。

④ Dさん (女性) — 舞台に取り組んだことについてのナラティブ

60歳以上の演劇などは聞いたことがあるが、このようなダンス・表現の活動は珍しいと思う。高齢になると身体を動かすことは難しくなるが、動くことと観ている人に感動を与えられるようなものになると思う。観ている人は、励まされることもあるし、一緒にやってみたいと感じる人もいる。大きな影響を与えることができると思う。(中略)

舞台に慣れていない人には、(自由な表現というのではなくて)もう少し決まったことを教えて欲しいと感じているかも。(今回、音楽が何度も変わったが)音楽は事前に決めておいて欲しい。事前に何度も聞きたい。ダンスは音楽からイメージでできることも多いから。これまで、舞台前は音楽が耳から離れなくなることが多かったけれど、今回は音楽が浮かんでこなかった。選曲は、皆、良いと言っていたけれど。

舞台が終わって安堵感があった。間違えないかと、舞台はやっぱり緊張する。皆で一緒にすることは素敵だと感じるけれど、毎年やらなくてもいいのかな…。

舞台はやっぱり普通の舞台の方が良いと思う。観に来た人は、やっぱり体育館では見えにくいと言っていた。体育館の舞台袖は寒かったし。足音がとても冷えたから、来年も体育館でやるなら冷対策を考えて欲しい。

舞台経験の多いDさんは、客観的に、かつ冷静にワークショップの全体像を捉えていた。Dさんの語りは、このワークショップの舞台制作が数多くの課題を抱えていることを明らかにするものであった。参加者がそれぞれのもつ能力を十分に発揮して、一つの舞台を創り上げていくことを目指すのであれば、Dさんには、出演者としてのかかわりだけでなく、もっと積極的に舞台制作において役割を担ってもら

うことが必要であろう。

舞台を通して自己の悲しみと向き合ったCさんと、舞台を取り囲む外の環境に目を向けていたDさんは、それぞれに違うベクトルをもって活動に取り組んでいたことが明らかになった。

3.3 承認欲求を満たす場としての舞台

次に、AさんとBさんの夫婦のナラティブに注目する。夫(Aさん)主導でワークショップに参加し始めたAさん・Bさんの夫妻はこの講座の中で、経験が最も長い。なかでもAさんは、大変熱心に活動しており、「ここまで長く続けられて不思議」と語る。さらに、「このところ体力が落ちているのを感じる」と言いつつも、シニア向けの器械体操教室があればやってみたいという。舞台のために、「踊っていてもふらつくことがあるから、マットの上でも、身体をクルクル回転させるとか、日常にはそういう運動がないから、そういうのをやってみたい。踊りの要素を入れつつ、器械体操とか、無理なく柔軟性とか動きを身につけるようなものはないかな。少しでもきれいに見えるように。学生を見て、身長とか関係なく動きが大きくてきれいだなと。あれをちょっとでもできれば」と、さらなるスキルアップを望む語りがあった。舞台に立ったことについて、Aさんは以下のように語っている。

⑤ Aさん(男性)一舞台に取り組んだことについてのナラティブ

あの時(1回目の公演)は凄くびっくりした。僕は、今まで舞台に立つようなことがなかったから、とっても感動した。物凄く不思議だったのは、そんなちゃんとできているとも思っていなかったし、満足できる練習ができたとも思っていなかったけど、お客さんの反応、声かけてもらったり拍手してもらったりっていうのは、あんなに素敵というか、響くもんだなと思って。最後は凄かった。ああ舞台に立ってるってこういうことなんやって。初めてだった。娘家族や親せき、妹も来てくれていた。実際僕も、こういうことで舞台、歌とか踊りとかを、皆さんが続けているのはこういう感動があるからなんだなって。あの年の年賀状は書きたいことがいっぱいあった。新聞にインタビュー

もされたし^{*)}。

定年してから堺市のシニア向けの生涯教育に入っているのだが、その人が偶然公演を観に来ていた。「新聞にも出てたやん、凄いな!」とか言われた。「お前何してんの、こんなところで」とか言われて、「いや、実はね…」みたいな。そういうのも良い刺激になった。

照明が当たるのは初めてだった。緊張は凄くしていたと思う。機材が高いから壊さないようにとか、いろいろ気にしながら。学生さんが「肩の力を抜いて。笑顔、笑顔!」とか声をかけてくれて。こわばってたんだらうな。良い思い出。

※産経新聞「大学×シニア=地域の元気」p.14(生活面)平成29年11月29日に公演のことを紹介する記事が掲載され、Aさんへのインタビューが取り上げられていたことを指す。

Aさんは初めて本格的な舞台に立ち、多くの観客や家族、知人に褒めてもらったことに対して大きな感動を得ていることが分かる。さらに、2年目の公演についても以下のように語っている。

⑥ Aさん(男性)一2回目の舞台に取り組んだことについてのナラティブ

舞台に立ってるっていうのは、ああいう高いところでやってる方(1回目の舞台)が迫力はあるなと思った。それでも、あれだけの裏方の人がこっちに来て舞台を作ってくれて凄い。ああいうのは感動した。僕らだけじゃないけど、それに対してあれだけ一生懸命作ってくれて、そこで踊らせてもらって。

照明の先生が1年目の時に、“皆さんは凄い、素晴らしい、素敵だと思う”と言った。“普通はこの年の人らは孫の発表を観に行くのに、逆に孫が観に来てくれて、観てもらっているのは凄いや”という言葉は印象的で、ああそうだなと、続けたいなと思った。でも今年は打ち合わせの時に照明の先生が、“去年観た時の素敵なお雰囲気がないよ”と言われていた。あれで、なんでだろう、去年はそんなに訴えるものがあったのだろうかと思って、今までもらったDVDとかを観ていた。アマチュアのやるもので、あんなプロの人が面白いって思えたのは、どういふもので伝えられたのだろうか

というのが今の宿題。そういうものが出せるっていいな。僕はこれまで続けてきていて、僕と同世代の人に、“結構やるやん”と思ってもらえるような踊りなんて全然できないから、そういうのを与えられたらいいなというのがずっとあったんだけど、照明の先生からの話を聞いてから、どういう風なものを目指したらいいんだろうというのが、あれからずっと頭にある。それが気になっていて、次はどんな目標にしようか考えなければと思っている。

このようにAさんは、自分達の表現が他者にどのように見えるのか、どのように受け止められるのかということについて意識している。また、娘家族や孫が観に来て、「じいじ頑張ってるやん！すごいやん！」と言ってもらいたい。（舞台が）そういう場であるということに意義を感じている」とも語っており、舞台はAさんの存在と努力を披露する承認欲求を満たす場として捉えられていると推察できる。

一方、妻のBさんは、舞台の制作過程で感じた“仲間意識”について語った。

⑦ Bさん（女性）—舞台に取り組んだことについてのナラティブ

公演が終わるごとに“仲間意識”っていうのかな、そういうのを感じている。DさんともTさん（一緒に踊った人）とも、公演まではあまり話さなかったけど、よく話すようになったから。ここに来る人たちはさばけていて、気さくで、感じのいい人が多いし、最近はとくに仲間意識を感じるから楽しいと思う。公演はしんどいけど、向上できると感じる。なんでも、イベントの後は、自分でも慣れや成長を感じるから良いことと思うけど、緊張する。踊りがよくできる人の動きを参考に、こんなふうにしたら綺麗になりそうやなあという目でも見てるけど、そればかりしてたらしんどいから、これくらいでいいかなと思って、割り切ってるようなところはある。でも今回は膝が痛かったけど、頑張ってた練習したと思う。ちょっと無理したかなあ。

Bさんは、公演のことより、終わってからワークショップの活動そのものが、仲間意識を感じられて

楽しくなると語っている。そして、Bさんの場合も、公演によって得られた達成感と、家族が観てくれることに喜びを感じていることが、以下のナラティブから分かる。

⑧ Bさん（女性）—舞台に取り組んだことについてのナラティブ

（舞台は）良かった。達成感があった。やっける限り、やっぱり発表の場は必要と思う。発表の場があると張り合いがあるし。娘も“楽しんで活動できてて良いね”と言ってくれるし、孫も“ばあば、可愛い。じいじ、カッコいい”って言ってくれたからすごく嬉しかった。

うまく踊れないことがプレッシャーになるから、夫（Aさん）に、舞台に出ないでおこうかなと相談したけど、“無理せずに、できることだけしたらいいやん”と言われたから舞台に出れた。やっぱり舞台は達成感があって良かった。

Bさんは、夫のAさんと一緒に活動することが好きだという。新聞に掲載されたときは、近所の人に「すごいしてるのね」と褒められて、ちょっとした有名人のようになって、（サークルの）知らない人にも声を掛けられたりした。夫婦でこういう活動をするのは珍しいのかな。友達からも“仲が良いね”と言われるけど、二人でやっける方が気楽で良いと感じてる」と語った。二人は、家に帰ってもよくワークショップのことを話しているといい、公演前はとくにワークショップのことが、会話のきっかけとなることが多いという。

夫妻のナラティブから、Aさんは、自分の表現技術を上げることに意識を向けながらも、Bさんを支えて背中を押し、舞台と一緒に取り組むことで、Bさんの喜びや達成感をも保障しているのであろうことが推察された。

3.4 舞台は自主的に取り組む創造活動

次に、もう一組の夫婦、Eさん・Fさん夫妻のナラティブを紹介する。この二人は、妻のFさんが広報で見つけて、夫のEさんを誘っての参加であった。Fさんはワークショップに参加して、以下のことを感じたと言った。

⑨ Fさん（女性）—ワークショップに参加しての
ナラティブ

今までこういう経験はなく、テニスやボーリングもしているがそれらとは違う、身体の内側からほくしていく感じ。皆で一緒にワークするのが楽しい。年をとってから皆で一つのことに取り組むとか、そういう経験があまりなかった。一緒に一つのことを創り上げていくのがすごく楽しい。同じ世代の人とも、学生、卒業生とか違う世代の人ともできるのが楽しい。今まではなかった、そういう人とのふれあいや関わりが自然とできる。いろんな人の人生も見れて、人生経験になる。一つのことを一緒にやる。同じ舞台を創り上げることとか、自分の人生に今まで経験していなかった。ずっと仕事をしていて、責任とか重圧とかからやっと取り払われて、これから自由になれると思ったときに身体表現に参加できたので、凄くラッキーだったな。ここでこんなことをできて、先生と巡り会えたことがラッキーだった。広報でちょっとした記事を見つけただけなのに、自分の人生を豊かに。妻とか親とか子どもとかでなく、個人の個としてできる、表現できるというか、好きなようにできる。今まで自分の中に眠っていたものが呼び起こされる感覚があった。

Fさんは、非常に明確な感覚をもって、ワークショップとの出会いを振り返った。これまでしたことのない、皆で一緒に舞台を創り上げるという体験は、Fさんの「人生を豊かに」するほどのものであったことが分かる。その舞台について、Fさんは以下のように語った。

⑩ Fさん（女性）—舞台に取り組んだことについて
のナラティブ

ああいう経験は今までなかった。全然あがらなくて意外と平気だった。以前はワークの前に挨拶するのも嫌だと思うくらい緊張していた。でも違うんだな、…というか、自分の中の新しい自分を発見するような感じだった。意外とあの中でも表現するというのが楽しくて。照明が当たって舞台上で踊るのは快感だった。ここへ来たら主人のこと

なんて忘れてるし、自分が必死なので。どういう表現したら良いのかなと、そういう部分に頭を使っている。いつも同じような表現になってしまうので、K-popとか若い人のダンスも見たりして。やっぱり自分が「わくわく楽しく」というのが一番のコンセプト。心躍るといふか。

私たちは、学生が持っていないシビアな経験や悲惨な経験などの人生経験があるから、その人生経験を使ったダンスができれば良いと思う。どんなものでも自分たちからかけ離れたものはできないと思う。自分たちが元々持っているものの延長からパフォーマンスを考えていければ良いと思う。それは身近なものでも良いと思う。

オーストラリアの国民的振付家といわれるグレアム・マーフィーは、高齢者のダンスカンパニー“マチュア・アーティスト・ダンス・エクスペリエンス(MADE)”の振付けをした経験から、ダンスに取り組む高齢者について以下のように述べている。

高齢者が踊ることについて、肉体的な健康面ばかりが言われていますが、健康であらねばならないのは魂のほうです。ですから、創造的な活動をしているという実感を欲している高齢者は、単にエアロビクスをするだけでは満足できないのです。(中略) 高齢者は皆、正直ですし、自分自身の物語を持っています。高齢のダンサーたちによって舞台上で繰り広げられるのは、彼らが生きてきたことそのものです(マーフィー, 2018, p.16)。

Fさんも、自分たちが持つ人生経験を下敷きに、それぞれの年代にしか表現できないものを踊ることに意味を見だし、そのことに対して「新しい自分を発見するような感じ」をもち、それを表現するのが楽しいと語っている。一方で、2回目の舞台のことを聴くと、「2回目の方が、皆の気持ちが重なってなかったように思った。1回目の舞台をしたときは、一丸となってやるぞという意欲を感じた。2回目の時は慣れてしまったのかな。意識が薄れている感じがした。皆もっと一生懸命やって欲しかったな」と顔を曇らせた。Aさんと同様、ただ舞台上に立つだけでは満足できず、全員が一丸となって作品創りに取

り組むことを望んだFさんは、公演後の反省会の時に、「皆さん、来年はもっと自主性を持って取り組みましょうよ」と呼びかけた。その思いについて聞いてみた。

⑪ Fさん（女性）—「自主性」を持って取り組むことについてのナラティブ

私たちがやっている中から、作品のテーマとか、自分たちでこういうものをやりたいんだというものを持たないと、いつも先生に任せてはダメ。だから皆に話し合いもさせているんだと思うけれど。先生の指揮のもとで「ああしろ、こうしろ」じゃなくて、もうちょっと自分たちがこういう作品にしたいんだというものを持たなければいけないのかなと思う。やらされているんじゃないで、自分たちがやっているんだという気持ちを皆にもっと強く持ってほしいと思って、そう言ったのかな。私もダンスのことは分からないし、経験もないので。精神的な気持ちのことを言ってる。ここへ来てから自分自身も変わったし、全然舞台に立つとは思っていなかったし、自分が舞台に立つと震えて踊れないわと思ってたけど、意外と踊れたことに驚いている部分もある。意外と皆そうかな。あれだけの経費をかけているんだから、自分たちの中からやる意識を持ってやらないと舞台が勿体ないと思う。

皆で話し合って、こういう風にしよう、ああいう風にしようとか、話し合いの中で良いものができると思う。歳を取るとあまりそういう機会はない。強い人が勝つというか、その人の意見が通ってしまうということが多い。皆でああしよう、こうしよう話し合うことが大事。そんな中から、皆どういう意識を持っているのかなっていうのが分かると思う。自分たちだけでなく、その日一緒にやる卒業生とかも、皆が一緒になってフィナーレを迎えるのが良いと思う。世代を超えてひとつの舞台を最初から最後まで皆で。どこの部分が欠けても良くない。精神的な余裕も必要だけど、緊張感を持ってやらないと。

以上のように、Fさんは、参加者が皆で力を合わせて一つのを創りだすことに大きな価値を見い

だしてることが分かる。Fさんは、この舞台が、あくまでも自分たちが自主的に関わる創造的な活動であること、そして自身の経験を活かしてできる表現活動であるからこそ、深い満足を得ると考えているのだろう。

さて、このFさんに連れられて参加したのが夫のEさんである。Eさんは、昔の事故の影響で身体が硬いため、ワークショップも最初は辛くて、来るのが苦痛だったという。しかし、「徐々に身体になじんできて楽しくなってきた」と語る。Eさんの自分自身の変化についてのナラティブを以下に示す。

⑫ Eさん（男性）—自分自身の変化についてのナラティブ

身体に温かみを感じるような体感を覚えるようになった。後ろ足を持てるようになってきた頃から[※]。あの頃はよくできたなと自分でも。凄く前向きになってきた。やろう！できたら嬉しい!!

とくに、北野田で完成した時（1回目の舞台を踊り終えた時）は涙が…。「あんた、なんで泣いてるの」って言われて。それまでいろいろ苦しかった。振りをなかなか覚えられないし、皆さんに迷惑をかけるかなと思いつつ、「明るい顔して！Eさん」と言われながら。“できたんだ”という自分自身への喜びがあった。辛かったこともいっぱいあって、涙が出た。僕くらいかな。こちらでの発表の時（2回目の舞台）も、人数が多い少ないじゃなくて、自分たちで一つのを完成させられた喜びが、とても嬉しかった。

※うつぶせに寝て、後ろ手に足を持って反る運動のことを指す。Eさんは最初、身体が硬くて、足に手が届かなかった。

Eさんの語りは、最初はできなかったことができた喜びと自信にあふれていた。1回目と2回目の舞台で大きく違っていることはなかったと語るEさんは舞台について、次のように語った。

⑬ Eさん（男性）—舞台についてのナラティブ

（舞台という）目標があるのは凄くいいと思う。それに一週間に一回でも（完成に）近づいていって、自分でも家に帰って、どうやったかなとやりたりしてるくらい。

発表できる場を目標に身体を慣らしていく。その中で、頭の中でフォーメーションを覚えていくのは凄く良いと思う。最終、大学の中（での発表）でもいい。皆で力を合わせて観てもらおうというのが、凄く目標に向かって毎週毎週階段が上がっていくような感じで、私は凄く良いと思う。あれ（舞台）がなかったら、その都度身体柔らかくなって“楽しかった”で終わりだけど、完成したのを見てもらうと…。

Eさんの語りの中には、“完成”という言葉が頻出していた。「完成したのを見てもらうという目標がある」、「完成した後の感激があった」、「完成した喜びが…」という具合である。一つのをやりきる喜び、やればできるという自信が、「次も頑張らないと。もう少し上手になりたい」という次への目標を導いている。

Fさんは、夫のEさんの身体のことを気にしつつも、ワークショップに来たら忘れてしまっているというが、「最初は嫌だと言っていたのに、送られてきた動画を何度も繰り返し見て復習しているのは、主人（Eさん）の方なんですよ」と嬉しそうに語る。夫妻の語りからは、それぞれが自分の目標をもって、熱く活動に取り組んでいることがよく分かった。

4. ワークショップの課題 —まとめにかえて

本稿では、高齢者と学生がともに創る舞台公演の参加者に対して、公演後に実施したインタビュー調査のナラティブの内容を精査し、舞台制作の過程と舞台公演（発表）を含むワークショップが高齢者にとって、どのような意味をもっていたかを明らかにした。

とくに初めての参加者にとっては、自由に動くことや自由に表現できることが楽しく、“癖になりそう”な活動としてとらえられていた。舞台を2回経

験した参加者にとっては、自己治癒の一手段として作品に取り組む機会であり、仲間意識を強めたり、承認欲求を満たしたりする場でもあった。その一方で、舞台を取り囲む環境とその課題に目を向ける参加者もいた。

ナラティブの中に、より自主性の高い創造的活動として向上していくことを望む声があったように、この活動が地域に根付き、高齢者にまつわる様々な社会的課題を解決できる“コミュニティ・ダンス”として成長していくには、参加者の体力や体調にも配慮しながら、学生とともに企画や運営にも携わったり、衣装づくりを任せたりという役割づくりを考える必要もあろう。舞台に立って踊り、それを褒めてもらうことで自身の存在意義を確認したように、一人ひとりが舞台公演を創るための、かけがえのない構成員であることを実感できる仕組みづくりが必須であると考えられる。

引用・参考文献一覧

- 安彦講平 (2001) 「つくる」二重の協働作業 その場と関係性、“癒し”としての自己表現、34-37、エイブル・アート・ジャパン編。
- 稲田奈緒美 (2018) グレアム・マーフィー インタビュー、世界ゴールド祭2018アーカイブ、6-19、公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団。
- 岩澤孝子 (2013) 高齢者とコミュニティダンス、舞踊學、36, 148.
- 原田純子 (2014) 高齢者に対するダンス・ワークショップの可能性—地域連携事業「ダンス・ワークショップ」を事例として—、人間健康学研究、第7.8合併号、1-12.
- 原田純子 (2017) 一人ひとりの表現力を信じて～高齢者と学生が創る身体表現コミュニティ～、女子体育、59 (8・9)、114-119.

Significance and Problems of Stage Performance Experience for the Elderly participants in Inclusive Dance — A Case Study of The Workshop 'Dance for Everyone' —

JUNKO HARADA

Abstract

This paper discusses the results and problems of the elderly-student inclusive dance where the elderly and the students of the community create and perform dance together. A survey was conducted on the eight elderly participants and the contents of their narratives were examined.

As a result, those who experienced dancing on the stage and expressing themselves freely for the first time perceived it as a fun and 'obsessive' activity. For the participant who experienced the stage twice, it was an opportunity for self-healing, strengthening fellowship and satisfying their desire for approval. Among them, some turned attention to the stage environment and discussed its problems.

In order for this activity to take root in the community and to grow as a 'community dance' that can solve various social issues related to the elderly, the elderly should be invited to work together with the students and play such active roles as planning, managing, creating dance and making costumes. Furthermore, since it was found that the elderly dancers felt themselves to be meaningful and valuable by being applauded for their performance, it is considered essential to create a framework to promote this inclusive dance for the elderly persons: a standardized framework that allows each person to realize that they are irreplaceable members in creating a stage performance.

Keywords: dance, workshop, elderly, stage performance, community dance